

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	佐々木 新
2. 審査委員	主 査：連大教授（岡山大学）大守 伊織 副主査：連大教授（鳴門教育大学）葛西 真記子 委 員：連大教授（岡山大学）大竹 喜久 委 員：連大教授（上越教育大学）五十嵐 透子 委 員：連大教授（岡山大学）片山 美香
3. 論文題目 学校教員や心理専門職になり得る大学生を対象とした性的マイノリティに関する教育のあり方に関する研究	
4. 審査結果の要旨 論文提出による学位申請者 佐々木 新 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和5年1月23日（月）17時30分～18時30分 場所：オンライン（Zoom）により実施 1. 学位論文の構成と概要 第1章 序論：本研究の背景と目的 性的マイノリティの心理社会的課題を述べ、近年の学校教育における当事者への対応の変化および課題をまとめた。本研究では、将来の学校教育やその支援を担う可能性のある大学生を対象として、性的マイノリティに関する教育とその効果について検討し、養成教育上の知見の蓄積を目的とした。 第2章 性的マイノリティに対する態度の改善に向けた介入研究の国際的動向 選択基準を満たす25編の論文（査読あり）を対象に、介入研究の国際的動向を検討した。介入方法としては、大規模な普及啓発活動、講義、ロールプレイング、当事者の講演等の幅広い実践がなされていたが、研究のエビデンスレベルの課題、実施時間の長さ、差別や偏見を軽減させる効果等に課題が見出された。 第3章 学校教員や心理専門職になり得る大学生の性的マイノリティへの態度と関連する要因 学校教員や心理職になり得る学生263名を対象に、アンケート調査を実施した。身体的性別、性的指向、受講経験、知人の有無、情報接触の有無を独立変数とし、各種の態度に関する尺度得点を従属変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果、参加者の性的マイノリティに関する態度の実態は比較的肯定的なものであり、過去の受講経験よりも知人という実在をもって知ることや文章や映像に接触する経験、参加者の性的属性（女性）が性的マイノリティへの肯定的態度と関連することが明らかとなった。	

第4章 学校教員や心理専門職になり得る大学生の性的マイノリティへの態度に及ぼす講義の効果

本章では、講義によって、受講生の性的マイノリティへの態度がどのように変化するか、検証を行った。大学教員の講義による介入により、性的マイノリティの人々が直面している心理社会的な困難さを印象づける効果はあることが明らかとなった。ただし、心理社会的な困難さ以外の印象や関わることへの自己効力感、差別・偏見に関する態度の指標では有意な変化が認められなかった。このことは、参加者が当事者の心理社会的な困難さの印象を強めながらも、差別・偏見に関する態度は変わらず、性的マイノリティは「社会的に不利な状況で気の毒だ。でもそれは致し方ない。」との心境に留まった可能性があり、講義の効果は限定的であったと考えられた。

第5章 講義に映画視聴を加える介入が大学生の性的マイノリティへの態度に及ぼす影響

次に、講義に映画視聴を加えた時の介入の効果を同様の方法で検証した。その結果、知人がおらず自ら情報への接触やボランティア活動の経験がない参加者においては性的マイノリティが身近な存在である印象を向上させる効果が認められた。一方で、性的マイノリティへの態度全般を改善する効果は認められなかった。

第6章 総合的考察

第4章および第5章で述べた介入では、その効果が限定的であった。しかし、性的マイノリティの当事者による直接的な講話がその聴講者の態度に与える影響を検証した共同研究では、講義内容および介入時間がほぼ同等であるにもかかわらず、性的マイノリティを身近に感じるようになり、当惑感の著明な減少が認められた。

本研究では比較的实施しやすい形態と内容・時間数の範囲で行う教育的介入の効果について、統制群を設定した上で検証を行ってきた。その効果と限界を明らかにし、当事者の講演は、短い授業時間であっても効果が高いことを示した。当事者の参画には課題があるが、より高い効果をもたらすための授業方法を考案する足掛かりを得た。

2. 審査経過

性的マイノリティは様々な心理社会的課題に人生の早期から直面していることが明らかとなっている。可視化されていない性的マイノリティ当事者も含め、あらゆる児童生徒にとって、自らの性のあり方に関する自己理解、ひいては他者の性のあり方に関する理解につながる教育の実践が求められている。本論文の発展性は、専門職養成課程のカリキュラム上実施可能な講義であることを要件とし、統制群を設定してエビデンスレベルの高い介入研究を実施したことにある。国際的な教育方法と比較し、短時間での講義の効果と限界を明らかにした。当事者が講師として教育に参画した場合の顕著な効果と課題も指摘した。学校教育において、より高い効果をもたらすための授業方法を考案する足掛かりを示しており、氏の論文は高く評価される。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、佐々木 新 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。